

母児同室とSTAIによる育児不安の経時的変化

分担研究課題「母児同室と母性の健全育成に関する研究」

研究協力者 鮫島 浩

【要約】

初産婦、経膈分娩、正常成熟新生児、などの selected case (n=19)を対象に、分娩後8時間の母児異室後、退院まで常時母児同室という体制で管理し、妊娠中、産褥5日、産褥一カ月のSTAIの経時的変化を検討した。STAIの状態不安と特性不安はいずれも平均値が時間の経過と共に有意に減少した。状態不安は5段階評価でも有意な減少を示した。減少の程度は病院からの直接サポートが得られない退院後に大きかった。STAIの状態不安の程度は育児不安の状態と関連性が高いことから、今回われわれの行った母児同室体制が退院後の育児不安を有意に減少させると考えられた。

【見出し語】

STAI (state-trait-anxiety-inventory)、妊産婦、母児同室、育児不安、精神面支援

【リサーチクエスチョン】

母児同室が育児不安の軽減に有効かを具体的に立証できるか？

母児同室が母性の健全な育成に有効な方策のひとつであるかを医学的に立証する。

その手段として対象を厳密に選択し、育児不安の経時的変化を具体的な数値で評価することを目標とした。

【研究方法】

宮崎医科大学とその協力関連施設の合計3施設で妊娠、分娩、産褥管理、一カ月検診を行った症例を対象とした。以下の全ての検討が行われた初産婦19例を最終的な対象として検討した。

育児不安の検討には(state-trait-anxiety-inventory) STAIを用いた。妊娠後期、産褥4-7日目、産後一カ月目の3回にわたり、直接本人に記載させる方法で調査した。

妊娠中に母親学級を開き、分娩後の母児同室のシステムについて説明し、さらに分娩後5日間の

肉体的、精神的サポートについて説明した。入院中に育児に関する多くの経験をしておくことの重要性や、マタニティーブルーズや育児不安は多くの褥婦におこりえること、またその際は医療スタッフが支援することなどを助産婦が説明した。

今回の対象は全例が母親学級出席者であり、上記の母親学級での指導後に最初のSTAIを行った。また、3施設間で同等のプロトコールを作成し、同様の指導を行った。

19例はすべて経膈分娩であり、分娩後約6~8時間は母児の観察のため、母児異室とした。その後、新生児コットに児を収容し、産褥5日目に退院するまで母親と同室とした。生理的黄疸や母児の適応で産褥5日までに母児異室となった症例は除外した。

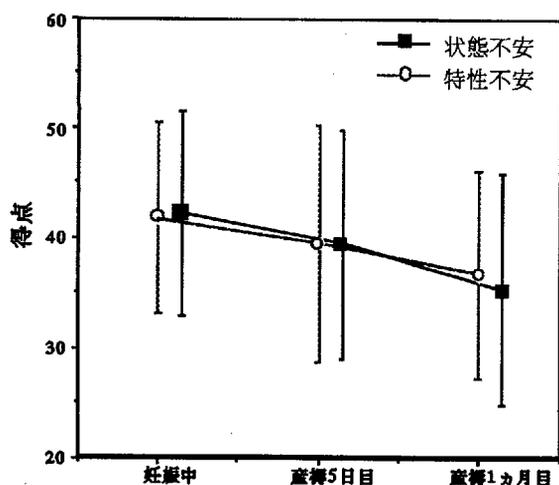
最初の授乳指導は分娩後約8~10時間で行い、その後は必要に応じて繰り返し行った。翌日には助産婦による沐浴指導があり、産褥5日目には退院指導の中で育児支援とその後の助産婦外来についての説明を受けた。また、育児に対するさまざまな質問には毎日のケアの中で助産婦が随時対応した。

STAIの経時的変化にはANOVAとstudent t testを用いた。分割表分析には χ^2 二乗検定[2x2表ではFisher直接検定]を用いた。2群間の比較にはunpaired t testを用いた。5%未満を有意差ありと判定した。数値は平均±標準偏差で示した。

【結果】

19例のSTAIの経時的変化を、状態不安と特性不安に分けて図に示す。

状態不安と特性不安の経時的変化

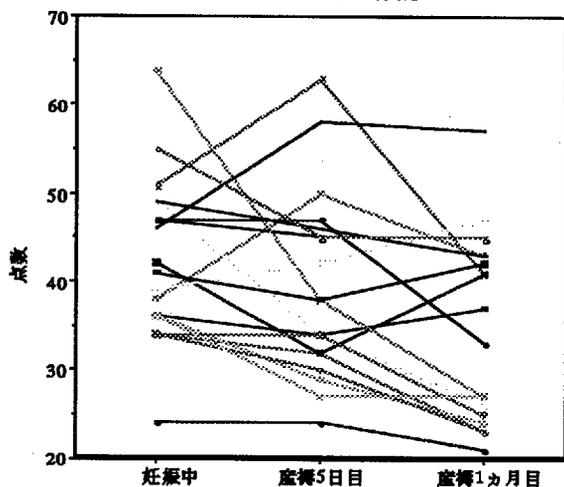


状態不安の平均値は、妊娠中の 42.2 ± 9.3 から、産褥5日目には 39.4 ± 10.5 へと低下し(有意差なし)、産褥一ヵ月目には 35.3 ± 10.5 へと有意に低下した。

特性不安の平均値は、妊娠中の 41.4 ± 8.8 から、産褥5日目には 39.5 ± 10.8 へと低下し、産褥一ヵ月目には 36.7 ± 9.3 へと有意に低下した。

1. 状態不安の検討

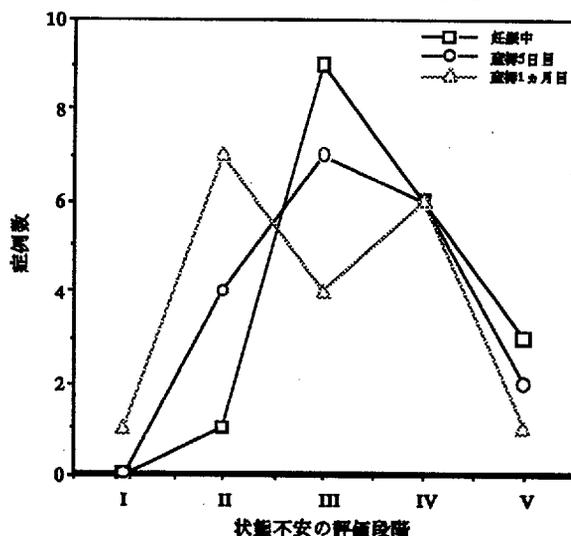
状態不安の経時的変化



状態不安の平均値は前述のごとく、妊娠中から産褥一ヵ月目にかけて有意に低下した。個々の症例で見ると、妊娠中の点数と比較し産褥5日目に点数が増加した症例は4例、低下した症例は15例であった。同様に産褥5日目から産褥一ヵ月目に点数が増加した症例は4例、低下した症例は15例であった。

状態不安は「非常に低い」I段階から「非常に高い」V段階までの5段階に分けて評価される。5段階のヒストグラムを経時的に比較したものを図に示す。

状態不安の評価段階別経時的変化

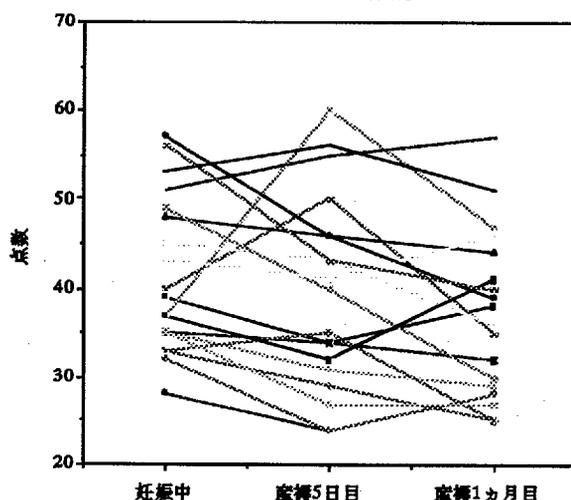


妊娠中から産褥5日目、産褥一ヵ月目と経つに連れ、ヒストグラムが低いほうに推移することが判る。また、「非常に高い」と「高い」を合わせた総数は、妊娠中の9例から産褥5日には8例、産褥一ヵ月目には7例と低下した。次に、「非常に低い」と「低い」のI群とII群、「普通」のIII群、「非常に高い」と「高い」のIV群とV群の3群にわけて分割表分析を行うと、妊娠中と産褥1ヵ月目との間に有意差を認め、産褥1ヵ月目で明らかに状態不安が軽減することが判明した。

また段階基準が1ランク以上高くなった症例を育児不安群とすると、妊娠中から産褥5日目までに育児不安が増強した症例は3例(15.8%)、産褥5日目から産褥一ヵ月目までに育児不安が増強した症例は1例(5.3%)、妊娠中から産褥一ヵ月目までに育児不安が増強した症例は3例(15.8%)であった。

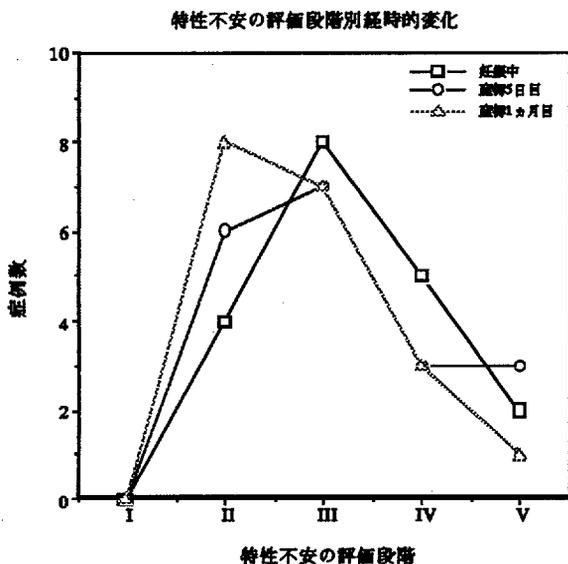
2. 特性不安の検討

特性不安の経時的変化



特性不安の平均値は前述のごとく、妊娠中から産褥一ヵ月目にかけて有意に低下した。個々の症例で見ると、妊娠中の点数と比較し産褥5日目に点数が増加した症例は5例、低下した症例は14例であった。同様に産褥5日目から産褥一ヵ月目に点数が増加した症例は5例、低下した症例は14例であった。

特性不安も「非常に低い」I段階から「非常に高い」V段階までの5段階に分けて評価される。状態不安と同様に、5段階のヒストグラムの経時的な変化を図に示す。



妊娠中から産褥5日目、産褥一ヵ月目と経つに連れ、ヒストグラムが低いほうに推移することが判った。また、「非常に高い」と「高い」を合わせた総数は、妊娠中の7例から産褥5日には6例、産褥一ヵ月目には4例と低下した。次に、状態不安と同様にI+II群、III群、IV+V群の3群にわけて分割表分析を行ったが有意な変化は認められなかった。

また段階基準が1ランク以上高くなった症例を育児不安群とすると、妊娠中から産褥5日目までに育児不安が増強した症例は5例(26.3%)、産褥5日目から産褥一ヵ月目までに育児不安が増強した症例は2例(10.5%)、妊娠中から産褥一ヵ月目までに育児不安が増強した症例は3例(15.8%)であった。

3. 状態不安と特性不安の相関

妊娠後期、産褥4-7日目、産後一ヵ月目の3回のSTAIから、それぞれの時期における状態不安と特性不安の相関を直線単回帰分析で検討した。いずれも両者間に有意な相関を認め、相関係数は妊娠後期0.79、産褥4-7日目0.86、産後一ヵ月目0.89で

あった。

特性不安は慢性的な不安傾向の個人差と関係している。そこで最初に行った妊娠中の特性不安の高低で、産褥期の状態不安が予測できるか検討した。妊娠中の特性不安がIV「高い」とV「非常に高い」の群と、III以下の3群とに分けて、状態不安との関係を検討した。妊娠中の特性不安が高かった群ではその後の特性不安も有意に高く、特性不安が長期間の不安傾向を示すことをあらためて示す結果であった。一方、妊娠中の特性不安とその後の状態不安との関係は、妊娠中には有意な相関が($p < 0.001$)あるものの、産褥5日目($p = 0.09$)と産褥一ヵ月目($p = 0.20$)には有意な関連性は認められなかった。

【考察】

今回われわれは、条件を単純化するために、対象を厳選して検討を加えた。まず、初産婦であること、合併症を持たないこと、妊娠中の母親学級で母児同室や分娩後のサポートの教育を受けていること、経膈分娩であること、新生児は成熟児であり黄疸などにより母児異室とならなかったこと、退院までに授乳指導、沐浴指導などをうけていること、である。次に、分娩後約8時間の母児異室後は退院までの4~5日間は常時母児同室であり、退院後も一ヵ月検診までフォローできる症例とした。さらに、妊娠中から産褥一ヵ月までの3回の調査が可能であった症例である。

理想的にはこれらの症例を2群に分け、母児同室群と異室群とで比較検討すべきである。しかし現実には、8時間の異室後、退院まで常時同室という群の検討となった。今後、母児異室群、母児同室群との比較に供することができるよう、条件設定を詳細に記述した。

STAIの状態不安は平均値でも段階別評価でも、妊娠中から産褥5日、産褥一ヵ月にかけて減少し、特に産褥一ヵ月では統計学的に有意差を認めた。

特性不安も平均値では状態不安と同様の有意な減少を示したが、段階別評価では有意差には至らなかった。

STAIの状態不安は、緊張や懸念という主観的に認知できる一過性の感情の高まりを示し、特性不安は慢性的な不安傾向の個人差と関係している。育児不安はさまざまに変化する児に対処しきれない不安が大きく、その意味では状態不安が良く相関すると考えられる。また、個人的な不安傾向を背景に持つ場合には特性不安と相関すると考えられる。われわれの行った母児同室制では状態不安

が有意に改善したことから、育児不安も有意に減少したと推測された。特に興味深い点は、病院からの直接的なサポートが得られない退院後一ヵ月検診までにさらに育児不安が低下したことで、母児同室制と退院までのサポートシステムが大きく影響したと思われる。母児異室制と直接比較することはできないが、今回の検討から、われわれの行った母児同室体制は育児不安を有意に減少させることが判明した。

育児不安が退院後一ヵ月検診までに有意に減少した理由は不明である。退院までの育児経験でその後の育児に関する問題を解決できる自信につながったと推測するならば、入院中に退院後の生活をシミュレーションできる母児同室が有用であると考えられる。

状態不安と特性不安の相関係数はいずれも0.75以上であり、有意な関係が示された。個人的に不安傾向をもつ妊婦では状態不安も大きいと考えられる。そこで最初に行った妊娠中の特性不安の高低で、産褥期の状態不安が予測できるか検討したが、妊娠中の特性不安と、産褥5日目と産褥一ヵ月目の状態不安との間に有意な関連性は認められなかった。したがって、妊娠中のSTAIの結果で産褥期の育児不安を予想することはできないと思われる。

【文献】

厚生省心身障害研究 平成6年度研究報告書
(主任研究者 中野 仁雄) 妊産婦をとりまく
諸要因と母児の健康に関する研究



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】

初産婦、経膣分娩、正常成熟新生児、などの selected case(n=19)を対象に、分娩後 8 時間の母児異室後、退院まで常時母児同室という体制で管理し、妊娠中、産褥 5 日、産褥一ヵ月の STAI の経時的変化を検討した。STAI の状態不安と特性不安はいずれも平均値が時間の経過と共に有意に減少した。状態不安は 5 段階評価でも有意な減少を示した。減少の程度は病院からの直接サポートが得られない退院後に大きかった。STAI の状態不安の程度は育児不安の状態と関連性が高いことから、今回われわれの行った母児同室体制が退院後の育児不安を有意に減少させると考えられた。